

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

マヤ興亡：文明の盛衰は何を語るか？

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 八杉, 佳穂 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5663

第六章 生業、交易

以前、儀式センター周辺の農地に住む農民が、トウモロコシや豆などを耕し、周期的に儀式センターに参りにくるといふ説が有力であつたことがある。しかしベリーズ溪谷やティカルなどの住居址の研究がすすむにつれ、そうした古い考えでは、マヤ社会の説明はできないことはつきりしてきた。

最近の住居址の研究によると、非常に多くの人が、各都市を中心にマヤ低地帯に住んでいたと考えられるようになってきた。ピラミッドや宮殿のある中心部から周辺にかけて、畑（ミルバ）の存在を許さないほど住居が密集していたからである。一つの大センターの隣には、さらに他の大センターがある。たとえばワシヤクトウンは、ティカルからわずかに一八キロしか離れていない。そこにも大勢の人がいたことは明らかである。

古代マヤ人は焼畑農業に頼っていたといわれてきた。四〇メートルを越すセイバやサポテの木が生い茂る森を金属器なしに切り倒して畑にしてきたのである。ユカタンでは一、二年トウモロコシを栽培したあと、十年あまり休耕期を置くといわれている。ペテン地方では二年から五年トウモロコシを栽培したあと、十五年以上休耕期を置く。しかし焼畑農業では、とてもそんな大人口は養えない。

そこで考えられたのが、トウモロコシにのみ依存していたのではなく、もっと他の作物も利用していたからという考えと、高い生産量が得られる集約農業を行なっていたからという考えの二つである。

トウモロコシが主要な食物であったことは確かである。それは創造神話の中心となっていることからわかる。たとえばキチエ族の神話『ポボル・ウフ』にはこうある。

最初人間は土から造られた。しかしそれは柔らかくてすぐ崩れ、動くこともできず、役に立たなかった。創造主たちは、次に木で人間をつくった。木でこしらえた人形は、人間のようにはしゃべり、木の棒の娘や息子を生んで増えていったが、魂もなければ、知恵もなく、自分たちを造った創造主を思い起こすこともなく、しかも四つ足で、あてどもなく歩き回った。そこで、天の心は洪水を呼び起こし、彼らは殺され、水に沈められた。しかし今もその子孫がいる。それは猿であり、木で造った人形にすぎない人間の見本だという。次に神々は、トウモロコシの粉で人間をこしらえた。キチエ族の始祖となった四人は、才能に恵まれ、この世にあるすべてのものを見ることができ、知ることができた。神々と同じ能力をもった人々であった。このため、創造主たちは、大きなものも小さなものもみな知っていることはよくないことだと喜ばず、彼らの目に霞を吹きかけた。彼らは以後、近くにあるものしか、地表のほんの少ししか見えなようにさせられた。

人間が神と同じではいけない、謙虚でなければいけないというマヤの人々の考えが如実に表

われているこの人間創造の一節が、私はたまらなく好きである。トウモロコシは、マヤ人にとってかけがえのない重要な作物であるからこそ、人間がトウモロコシからこしらえられたという神話が形成されたのであろう。神々の体系では、トウモロコシの神は主要な神であり、トウモロコシは大地の神の主要属性である。

低地マヤでは六種ばかりのトウモロコシがあるが、そのうちナルテル種が主要な種である。

雨の少ないユカタン北部と異なり、ペテン地方は二毛作が可能である。ナルテル種の収穫までの日数は九五〜一一〇日である。四五〇〜五〇〇ミリの雨量があれば良いが、ペテン中心部では一四〇〇〜二〇〇〇ミリの雨量がある。パレンケやコパン、ベリーズではさらに雨量は多い。そのため十一月に二番目の種蒔きを行なうことは珍しくない。収穫は一平方マイル当たり百人以上を養えるといわれる。

トウモロコシ以外には、豆や根菜が重要な食物資源であった。ペテンの土壤は肥沃で、隣に富み、水はけが良い。トウモロコシの成育に必要な窒素が欠けているが、豆類によってそれは補われる。ユカイモやサツマイモ、ヒカマイモなども同じ畑で育ちうる。スペイン人の征服後に書かれた書物では、ブレッド・ナットの木（ラモン、マヤ語ではオシユ）は飢饉の食べ物とされているが、これも重要な植物であったようだ。ラモンは遺跡のまわりに多くはえており、食物とした可能性が高い。ある計算によると、ラモンと根菜だけで、トウモロコシをとらなくても七万人ほどの人を養えたという。

マヤの住居は、広場を中心にし、その周りに家がある。家の周辺にいわば家庭菜園をこしらえ、パイヤやアノナなどの果実や薬草を得ていたと推測できる。

もちろん鹿をはじめ野豚、兎などの野生動物の狩りから、蛋白質を補給していたこともまちがいない。罾をつかった鹿狩猟は、マドリッド絵文書に描かれている。鳥や猿などは、現在マヤ高地のイシル族が使っているような長い吹き筒をつかって狩っていた。それは土器に描かれている場面からも裏付けられるし、吹き筒用の玉にちがいない固い粘土の丸玉が遺物のなかにあるからである。川や湖、海の近くでは、魚や貝も重要な蛋白源であったにちがいない。魚は干したり、塩づけにされ、内陸部まで運ばれたと思われる。そうしたもので、マヤの食卓は意外に豊かであったように思われる。

人口と生産量の問題を解決するもう一つは、農業の集約化である。カンペチエ州のカンデラリア川周辺、ベリーズ北部のニュー・リバーやオンド川周辺などでは、盛り土農業が行なわれていた。これはアステカのチナンバ農業にあたるもので、格子状に水路と農作地をつくったものである。水路と水路底の土を汲み上げ、土を盛り、農作地とするので、非常に収獲量が高い。そこではトウモロコシや綿、カカオなどが栽培されていた。水路では魚や貝がとれたはずである。ティカルやワシヤクトゥンなどの周辺は、雨季になると、水没する湿地であったので、おそらく、ここでも盛り土農業が営まれたと思われる。北の乾燥地と南のジャングル地帯のちようど中間にあるエツナでは、形成期後期から用水路とため池をつくり、灌漑農業が行なわれて

いた。さらに北のプウク地方ではチュルトユンという水ためがあつたし、チチエン地方ではセノータによって水が得られた。東海岸のコバー周辺には湖がある。

段々畑も集約農業の一つに数えられる。傾斜面に壁をいくつかつくり、土の疲弊を防ぐものである。これはリオベック地域とベリーズのマヤ山脈の東斜面で確認されている。リオベック地方は年間雨量が一三〇〇ミリで乾燥しているが、土地の荒れを防ぐ段々畑やマルチ（根圃）などが用いられた証拠がある。

スペイン人の征服当時に観察された農法は、焼畑農耕、またはナワトル語の名をとってミルパ農耕が、唯一のものであつた。それは今日でも引き続き行なわれている。雨季の前に、木々を切り、それを焼いたあとに、トウモロコシの種をまく。雨季の恵みの雨でトウモロコシは生長し、秋に収穫する。ミルパ農耕は木々を焼くうえ、熱帯地方では二、三年で地味はやせるので、移動しなければならぬ。そのため広大な土地が必要になる。土地の疲弊は、生態系の破壊になり、マヤ文明の崩壊の原因となつたという意見すらある。それにもかかわらず、その理論への疑いは、最近の考古学上の発見により、強くなつた。すなわち、段々畑の存在、盛り土、灌漑のチナンバ農耕のあつたことが認められるようになったからである。

古代マヤ人が、何を食べ、どのような生活をしていたか。それは最近の考古学で非常に重要な問題として、いろいろな方面から議論されている。考古学者の多くは、古代もトウモロコシを主産物とする生活を営んでいたと考えている。トウモロコシに依存する生活は、現在のマヤ

人に栄養学的な面でさまざまな問題を生んでいる。しかし、トウモロコシに依存した生活ではなかったという意見もいくつか提出されている。ラモンの木の実や、根菜植物に頼っていたとする意見についてはすでに触れた。これらは生産量が高いばかりか、土地の疲弊をもたらすこととはなく、保存も可能ということで、ラモンの場合はさらに人手は少なくてすむうえ、トウモロコシより栄養価が高いといわれている。根菜植物はトウモロコシに比べ、蛋白質は少ないが、それらは、水産、海産資源から補えるので、栄養学的に、健全な献立と考えられる。こうしたものへの依存という考えに加え、そうした食料資源を組み合わせて、バラエティに富んだ食事をしていたという意見も提出されている。さまざまな種類の園芸、農園、人工的な熱帯林など、それらはもちろん、主産物ではなく副産物として利用されていたに違いない。

食物生産のモデルは、遺構や遺物により推定できるが、何を食べていたかという、食卓のメニューは、生態系の調査や、民族学的調査からの類推に基礎を負ってきた。熱帯地域で、動物はほとんど残らないからである。しかし、花粉分析や動物の遺物の分析から、食卓の復元が試みられている。しかしこれらは直接的な証拠ではなく、時にはまちがって解釈される可能性がある。実際の食生活のよい資料は、骨のコラーゲンの同位体分析や組成の分析が有効と考えられる。たとえばラマナイの骨の分析を紹介してみよう。

ラマナイは、一九七四年から一九八五年にかけて、カナダのチームにより発掘調査されたが、ラマナイという遺跡名が、古代の名をそのまま継承している可能性が高いうえ (Iamantai <Ia-

man an「水に沈んだワニ」)、形成期から、スペイン人の征服後までのほとんどすべての時代の遺物が見つかつた稀有な遺跡として、有名となつてゐる。この骨から、マヤ人たちがどんな食物に依存していたかが推定されている。それによると、形成期には約五〇%、古典期前期には六〇%もトウモロコシに依存していたものが、古典期後期から終末期になると四一%から三七%に落ちてしまふ。しかし後古典期になると、現在のマヤ人並みの七〇%ほど依存することになり、以後その割合はあまり変わらない。

このラマナイの一例から結論を引き出すのは危険であるが、花粉分析からも、古典期から後古典期に移行する間、トウモロコシの生産は減少するらしく、どうやら、古典期には、トウモロコシへの依存は少なくなつたらしいのである。それではその他の植物への依存が強くなつたのであろうか。ラモンの木の実や根菜植物の依存におこるはずの齒のカリエスは見当たらなく、それらに依存していたことを肯定することはできないが、おそらくそれらのほか、さまざまな植物を摂り、補つていたのであろう。トウモロコシの減産がマヤ地域一帯にみられるとしたら、それは、土地の開発、疲弊のせいと考えられるが、ペテンにたくさんある湿地をうまく利用した盛り土農耕や、段々畑の開発による集約化とどのような関係になるのか、これからのさらなる調査が必要である。

古典期後期には海水の上昇があつたことがオンド川一帯で確かめられているし、最近調査がなされた、ユカタン北部のイスラ・セリットというチチェン・イツアの貿易港とみられている

小さな島の調査でも確認されている。トウモロコシの減産は、そうした自然現象と密接に関係していると思われる。

天候の異変は、マヤ文明の滅亡と密接に関係する問題といえるのであるが、さらにトウモロコシに損害を与えるウイルスが蔓延したという説がある。ウイルスによるトウモロコシの生産量の減少が、いやおうなしに、トウモロコシへの依存を少なくしたのかもしれない。

マヤ人の食事

現在中米に住むインディヘナは、トルテイリヤといわれるクレープのようなものを食べている。これは乾燥したトウモロコシを石灰を入れた水につけ、ゆでた後、挽いて団子にしたものを、薄く円盤状にして焼いたものである。これを焼くためにはコマルと呼ばれている平べったい土鍋がいる。ところが、マヤ地域では、こねるための道具であるメタテ（平うす）とマノ（挽き棒）は出土しているが、不思議なことにコマルは出土していない。ということは、マヤ人はトウモロコシを現在食べているような方法で調理したのではないことになる。さらに十六世紀以降の民族誌に、マヤ人がトルテイリヤを食べたという記録がほとんどないところから、どうもトルテイリヤを食べてはいなかったらしいのである。逆にスペイン人神父たちがトルテイリヤの作り方を教えたという記録さえある。トルテイリヤは、メキシコ高原ではテオテイワカンやトゥーラなどでコマルが出土していることからわかるように、古くから主食として食



写14 トルティリヤを焼く現代マヤ人
(グアテマラのサン・フランシスコ・エル・アルト)

べられていた。マヤ人は、トルティリヤという料理法を、メキシコ高原の人との接触から学んだらしいのである。

では古代マヤ人は、何を食べていたのだろうか。それはタマルというトウモロコシを蒸した団子状の食物である。現在でも、マヤ人たちはタマルを食べる。これは団子にしたものをバナナやトウモロコシの葉で包んで、蒸したものである。儀礼や祭りなどでは、中に七面鳥の肉などを詰めたりして、ごちそうとなる。これは深い壺で蒸される。壺はたくさん出土しているので、古代マヤ人の主食はタマルであったようである。では彼らはタマルだけを食べていたのだろうか。もちろん違う。豆類、ヒョウタン類のほか、チコサポテなどの果物やココアなども食卓にのぼったであろう。蛋白資源としては、鹿、ペッカリー、犬、てんじく鼠、貝、魚などを食

べていたこともまちがいない。

交易

トウモロコシを挽いたにちがいないメタテとマノは、石灰岩のものも少しではあるが見つかっているが、ほとんどは火成岩などの硬い石が使われている。そうした石は、マヤ文明の栄えた低地にはない。それらは高地からもってこなくてはならない。

マヤ文明が発達した低地ジャングル地帯は、メタテやマノのほか、黒曜石や翡翠、塩などの必要物資の多くのものが欠けていた。そうしたものを得るために交易が行なわれたに違いない。交易は、すでに形成期初期からはじまっていた。もともと交易といっても、ものを産地から直接得る場合もあれば、品物を交換する場合もあり、また商人が存在して売買が成り立っていた場合など、いろいろな場合が考えられるが、考古学的に確かめられるのは、ものだけで、そのほかのメカニズムは、十六世紀以降の文献や、ものの分析や実験から推測しなくてはならない。交易には、同一環境内での交易から、環境の異なる地方間の交易、さらにはメソアメリカの他文明との交易があり、そして交易品には、日常品から贅沢品までいろいろなものがある。地方レベルでは、食べ物、毛皮、塩などが交易品であったに違いないが、残念ながら、それらは残らないので、あとをたどることはできない。

同様に、考古学的な追跡はむずかしいが、重要であったものにカカオがある。十六世紀の記

録によると、カカオは貴重な飲み物としてばかりでなく、通貨として利用されていた。カカオは、平均気温が二一度くらいで、高度が六五〇メートルくらいまでの湿潤な熱帯にいちばんよく成育するといわれ、チエトマル付近、ホンジュラスの北西のウルア盆地、チアパスからグアテマラの太平洋岸の傾斜面で、生産されていた。そこから交易によって、またはそうした地域を支配下に治めることで、マヤ人たちは、カカオを得ていたと思われる。

カカオはマヤの土器に描かれているし、カカオを入れたと思われる土器もみつかっている。そうした土器には、カカオを表わしたと思われる文字が読み取れる場合がある。マヤのことばで、カカオはカカウというところから、現在使われているカカオということばは、マヤから採られたことばといえるだろう。もつともカカウがマヤ独自の言葉であったかとなると問題で、カカオの一大産地であるチアパス州の太平洋岸一帯は、オルメカ以来ミヘソケ語族の地であったらしく、それらの言葉でもカカウというところから、マヤ人もそこから借用した可能性がある。

カカオが飲まれていたことは、土器に描かれたいくつかの場面から考えても、ほぼまちがいない。カカオはまた通貨としても利用されていた。しかし、それは征服期では確かであるが、古典期でもそうであったかはわからない。また通貨として、マヤでカカオがどれくらいの価値があったかわからない。ちなみにオビエドの記録によると、ニカラグアでは、カカオ一〇粒でウサギ一匹買え、売春婦は八〜一〇粒であった。しかしメキシコでは、人夫の一日の労賃が一

○○粒もしたという。

ヤシユチランをはじめとする記念碑に登場する女性は、美しい織物の服を身に着けている。それらは綿を紡いだ糸で織られたものと思われる。綿を紡ぐ紡錘車の重りの玉がたくさん出土しているし、実際に織物も、少しではあるが、出土している。また織っている姿は、ハイナ島から出土した土偶にみられる。それは現在、グアテマラの女性たちが、織物を織っている姿とほとんどかわらない。原始機とか後帯機といわれるものである。記念碑にみられる模様をみると、織物技術はかなり高く、その伝統は、現在でもグアテマラの女性に引き継がれている。

マヤ人の好んだものに、ケツアル鳥の羽がある。頭飾りに羽を用いている人物が記念碑に描かれており、高貴なシンボルとして使われていた。ケツアル鳥は、低地にはおらず、グアテマラの高地からもたらされた。

蜜、蜜蠟、塩も重要な交易品であった。塩は、ユカタンの海岸地方やグアテマラのペテンのサリーナ・デ・ヌエベ・セロスなどの産地から、広い地域に運ばれたに違いない。蜂蜜は、マドリッド絵文書に蜜蜂の養蜂が一〇ページにわたってとりあげられていることから推測できるように、非常に珍重された贅沢品であったのであろう。土器にみられるレジスト技法は、蜜蠟を利用したものらしく、蜜蠟も重要な品であった。

カカオや塩などの交易路をたどることはむずかしいが、土器や石、貝、骨、ときには金属は、遺物として残っているのです、交易の実態をかなりよく知ることができる。たとえば土器につい

ては、出土した土地のものかどうか、土の調査からわかる。パレンケ近郊の土器の調査では、様式や技術は同じであるにもかかわらず、その土地土地でとれる土をつかって土器を生産したものが多く、生産地が異なることがわかった。また異なった土を使ったものもあったが、そうしたものは、その土地の産物ではなく、交易や貢ぎ物としてもたらされたものであることもわかった。

マヤ文明で有名な交易土器に、精陶土器 (fine paste ware) と鉛様の光沢をもつ土器 (plumbate pottery) がある。この二つは特殊な陶土や技術のため、生産地がほぼ確定されている。精陶土器の起源地は、タバスコからカンペチエにかけての低地平原一帯であり、鉛様の光沢土器は、太平洋岸側のメキシコとグアテマラの国境付近でつくられた。そのため、これの存在により、交易路が推定できる。たとえば、ルバアントウンで発見されたフライン・オレンジ土器はセイバルのものと同定された。おそらくパシオン川をさかのぼり、マヤ山脈を越え、プシルハを通り、ルバアントウンにもたらされたのであろう。

黒曜石の産地は、メキシコ高原からグアテマラの高地で数多いが、マヤ地域では三つの産地が有名である。イシュテペケの黒曜石は、四〇キロ離れたサルバドルのチャルチュアバの人に紀元前一二〇〇年から前九〇〇年頃に利用された。原石でチャルチュアバにもつてこられ、そこで加工された。マヤ低地での最初の黒曜石は、クエリヨの形成期前期後半の紀元前一三〇〇年頃のものである。それからバルトン・ラミーやセイバル、エツナなどでも用いられた。形

成期中期の黒曜石は、すべてグアテマラ市北西にあるサン・マルティン・ヒロテペケのものである。そこからパシオン川、ウスマシント川をとり、西やペテンにもたらされ、そしてオンド川をくだり北東に運ばれたと思われる。

古典期の黒曜石の産地はイシュテペケとエル・チャヤルであり、チャヤルの発展とともにヒロテペケは衰退した。チャヤルの黒曜石は、ベラバスの山を越え、パシオン川をカヌーで下り、セイバル付近で二つにわかれ、一つは、内陸のティカルからオンド川をつたいベリーズ北部へもたらされ、もう一つは、セイバルからパシオン川、ウスマシント川を下り、パレンケやタバスコ沿岸へ運ばれた。東の道は、マヤ山脈をこえルバントゥンへいき、ワイルドケインベイからカリブ海沿岸をカヌーで運ばれたと思われる。一方イシュテペケの黒曜石は、モタグア川を下りユカタン半島へいったが、途中カリブ海沿岸から川をのぼり、ティカルやノフムルへいき、さらに陸をとりプウク地方へもたらされた場合と、半島まわりでパレンケやエツナへいった場合があったと考えられる。大きくみると、陸と川のルートと、カリブ海沿岸からユカタン半島へ、川を上り、内陸にいくルートがあったとみられる。

メキシコ高原のテオティワカンの影響は古典期前期に顕著であるが、後古典期時代はトゥーラの影響がみられる。黒曜石はこれらの大都市が支配した黒曜石の産地からもたらされた。

翡翠の緑は成長するトウモロコシや水の流れの色と同じで、貴重なものの象徴であった。黒曜石と同様、モタグア川のいくつかの地点で産出されるだけであり、そこから各地にもたらさ

れた。翡翠はマヤ人のもっとも好んだ石である。翡翠の種類にはネフライトとジェイダイトがあるといわれているが、ネフライトは中米にはなく、利用されたのは、もっぱらジェイダイトである。中米ではゲレロ州のオロ川、バルサス川、イダルゴ州のシマパンのほか、サカテカス州、ケレタロ州、サン・ルイス・ポトシ州などでも産出するが、マヤ地域では、モタグア川流域のサン・クリストバル・アカサグアストランの近辺しか知られていない。しかし翡翠は蛇紋岩があるところに見つかるので、ベリーズのマヤ山脈でも翡翠が産出する可能性がある。

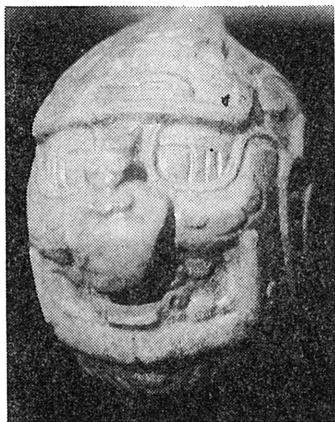
翡翠はマヤ人のもっとも好んだ宝石であるが、意外なことに、マヤの文献では、翡翠についてほとんど触れられていない。ランダが記す次のような一節の石が翡翠であろう。

「彼らがつとも熱心だった職業は商業であった。彼らはウルアやタバスコの地へ塩や衣類や奴隷を運び、それらすべてを通貨としていたカカオや石の数珠玉と取替え、これでまた奴隷やもっとも美しい良質の数珠玉を買っていた。こうした美しい数珠玉は、首長たちが祭日の日に装身具として身につけた。その他にも赤色の貝で作ったものを通貨や装身具にしていたが、彼らはこれを網袋に入れて持ち歩いた」。

「人が死ぬと、死体には帷子を着せ、あの世へいったときに食べ物に困らないようにと、その口のなかへ、挽いたトウモロコシで作るコイェムという、食べ物にも飲み物にもなるものを詰め込み、また彼らが貨幣としている石を数個入れた」。

一方アステカでは、征服当時も翡翠は重要な工芸品であったようで、サアグンは翡翠にふれている。翡翠はチャルチウイトルといい、支配者と結びついた高貴なシンボルであった。また水と関連が深かった。征服初期には腰の痛みや腎臓病の治療に用いられていたが、征服後五〇年たつと、もう少なくなり、やがて忘れ去られてしまった。

翡翠については十分な資料がないが、考古学的には大量の翡翠が出土していて、古代には重要なものであったことがわかる。パレンケのパカル大王の墓から出た翡翠のモザイク仮面は有名であるし、同じようなモザイク仮面は、ティカルやカンペチェなどでも出ている。アルトゥン・ハでは、五キロ近い固まりに神の顔が彫られた見事な翡翠が出土している。二〇〇ポンド



写15 アルトゥン・ハ出土の翡翠製神頭

あまりの翡翠の固まりは、カミナルフユの建物A—6の階段の下から見つかっている。そのほか、首飾り、耳飾り、鼻飾り、ペンダントなどに翡翠は使われた。

中央アメリカからも金と銅の合金のトゥンバガや貝などがもたらされた。またコスタリカにはマヤの文字をもつ鏡や彫刻された翡翠や土器などが見つかっている。

このように、高地と低地、海岸と内陸の交易

のみならず、メキシコ高原やコスタリカなどのマヤ圏外との交易があった。交易を行なう組織力や交流による刺激が、マヤ文明の発達に大きな作用を及ぼしたことは否定できない。

物の流通経路の変化が、マヤ文明の興亡に重大な影響を与えた可能性がある。古典期までの交易は、河川と陸路が利用されていたと考えられるが、後古典期には、海上交易にかわつたらし。